フォルム NO.334 Since 1956
日文教育資料[図画工作・美術]

形 forme

特集

「わからない」を楽しむ、とは?

Interview
脳科学者
中野信子
先生

日文のWebサイト
日文

※本冊子掲載二次元コードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。
令和7年(2025年)度版中学校美術科内容解説資料として扱われます。

心が動く、その先へ。
日本文教出版

脳科学者・中野信子先生がひもとく アートと脳の豊かな関係

「わからない」を楽しむ、とは？

「わからない」を恐れ、「失敗」を嫌う子どもたち。
わからないことを受けとめ、楽しみ、
失敗を乗り越える手だてを知ることで
「生きる力」につなげていこうと語る
脳科学者・中野信子先生に、
今改めて「生きる力」の本質について伺います。

はじめに

「形 forme」は広く現代社会の要求に応える美術教育の理論と実践の紹介を目的として一九五六年に創刊されました。以来六〇年を超える長きにわたって、美術教育に寄り添って刊行を続けています。「形 forme」という書名は造形と人間形成をシンボライズしたものです。子どもたちのための美術教育に取り組んでおられる先生方、美術や造形にかかわるすべての方々、そして保護者の皆様のために、これからも、よりよい美術教育を目指す道標となる内容を目指していきます。

Index No.334

③ **特集「わからない」を楽しむ、とは？**
・脳科学者・中野信子先生がひもとく
アートと脳の豊かな関係

⑨ **ABC PICK UP**
阿部宏行

⑩ **学びのフロンティア（小学校）**
場所や材料と対話し、没頭できるように　三枝清美

⑫ **村上センセイの　教科書利用のススメ**
｜番外編｜ 令和3年度版中学校美術の教科書、どう使う？

⑭ **まず見る**
｜第37回｜ 垂直をみる　成相 肇

⑯ **児童作品解説 私の見方**
林 耕史

編集・デザイン：東京ピンポン
表紙写真：川瀬一絵
[p.2-8 特集]
文：西尾真澄
撮影：川瀬一絵（p.2、p.4-7）

ページ下部に、それぞれのコーナーと校種の関連性の強さを表示しています。各企画は小・中・高全ての校種に関連がありますが、特に関連の強い校種を大きくしています。

例：| 小 | 中 | 高 |　特に小学校に関連の強いコーナーを表します。

「わからない」はコワイ？

――中野先生の著書『中野信子のこどもアート脳科学』には『「わからない」を楽しむ高IQ脳のそだて方』というサブタイトルが付いています。「わからない」ことが怖い、恥ずかしい、よくないと思ってしまうような人でも、「わからない」を楽しめるようになりますか。

中野　どうして「わからない」と怖いのでしょうか。そこには、正解に拘泥する若者や子どもたちの姿が見え隠れしますね。極度に失敗を恐れる子どもたちに「わからなくてもいいよ」「失敗してもいいよ」と言っても、おそらくその真意は伝わらないでしょう。

誰しもみんな、大なり小なり失敗しています。でも、失敗しても人生は、世界は続いていく。ですから自分もしくは誰かがその失敗のフォローをしなければなりません。そこで大切なのは「失敗をリカバリーする方法」です。

失敗のダメージを小さくして「失敗してよかったね」と言えるぐらいの結果にもっていくにはどうすればいいのか。そのリカバリー方法を知っていれば失敗も怖くありません。

もちろん、失敗しなかったときに比べたら、取り分は目減りするでしょう。でも、目減りする分量を減らす方法はあるのです。早めに謝ったら許してくれるかもしれない。謝り方によっては好感度が上がるかもしれない。

視野を広く、角度を変えて考え、最適解を導き出していく。それこそが今盛んに言われる「アート思考」なのだと思います。

中野信子のこどもアート脳科学
「わからない」を楽しむ高IQ脳のそだて方

脳科学を専門とする中野先生が、「アート」の視点から「わからない」を楽しむ「高IQ脳」を育て、世の中をサバイバルする術を伝える児童書。2023年10月発行、フレーベル館刊。

「わからない」を丸ごと味わう

中野　この本は「アートは楽しいし素晴らしいものだけれど、なぜ楽しくて素晴らしいのだろう」「なぜ私たちはものをつくり、それを楽しむのだろう」ということを、ちゃんと説明したいと思い、児童書という体裁で書き上げたものです。「美しいものは非合理的なものだ」「お金に余裕がないうちから、美しいものにコストをかけたりハマったりするのはおかしい」などという迷妄に惑わされず、「図画工作や美術は大事な教科だからこそ、コストも時間もかけるのだ」と、若いうちから知ってほしいのです。

「アートなんてよくわからない」という声も頻繁に耳にします。特に「現代アートはわからない」と言う。ですが、考えてみてください。最初からすべてわかっているものなんて見たいでしょうか。楽しいでしょうか。

アートはどう捉えても正解です。間違いなんてありません。どう捉えたのか、捉え方によって自分を知ることにもつながります。一つの作品を何度でも楽しめるし、自分を耕すこともできる。

わからなくていいんです。「わからない」という気持ちを切り捨てない。自分なりに考えて、受けとめて、丸ごと味わってみる。それこそが「生きる力」に直結する「脳の前頭前野を鍛える方法」なんです。

中野信子（なかの・のぶこ）

1975年、東京都生まれ。東京大学工学部応用化学科卒業、同大学院医学系研究科修了、脳神経医学博士号取得。2008～2010年、フランス国立研究所ニューロスピンにて博士研究員として勤務。2015年から東日本国際大学教授。現在は脳科学や心理学をテーマに研究・執筆活動を精力的に行うかたわら、マスメディアでも広く活躍を見せている。

「わからない」を楽しむ、とは？

前頭前野

「わからない」を楽しみ、「違い」を喜ぶ、人間らしさをつくる場所。

・考える　・アイデアを出す
・記憶する　・応用する
・判断する　・感情をコントロールする……など

眼窩前頭皮質

共感を生み、相手の状況を理解しようとする場所。「美しい」など、自分の感情の価値を決める。

「美しい」は役に立たない？

――脳の前頭前野と「生きる力」が直結している、というのは？

中野　一見、しこう品のようにも思える「美しさ」というものに対して、なぜ、私たち人間はわざわざコストをかける「脳」を持っているのでしょう。なぜ、明日食べられないものでも「美しい」と感じるのでしょう。

「美しい」という感覚は、脳の中でも前頭葉の前側＝前頭前野に位置する「眼窩前頭皮質」という場所で扱われていることがわかっています。ちょうど眉間の上ぐらいですね、ここで「美しい」と感じています。そもそも前頭前野は、思考、記憶、発想、判断、感情の制御など、人間らしい働きをするために重要な場所なんですね。

ここでネアンデルタール人の脳と、現生人類の脳を比較してみましょう（次ページ図）。現生人類に比べ、ネアンデルタール人の額は平たく後傾していて、前頭前野にあたる部分がとても小さく、「美しい」を感じる眼窩前頭皮質もほぼ存在しないことがわかります。

「わからない」を楽しむ、とは？

これはあの人に、あれはこの人に……引き出しを多く持つことが生きる力になる。

つまり「美しい」という感覚をもつことができた現生人類に対し、ネアンデルタール人はそれができなかったと推測できます。私たちは「美しい」という感覚を得たがゆえに共通の価値観を有し、集団を維持・発展させることができ、今まで生き残ってこられたのかもしれません。

「美しい」を感じられる脳を持ち、「美しい」に価値があると思える現生人類が結果的に生き延びることにつながったのなら、「美しい」を感じる前頭前野が「生きる力」に直結していると言っていいと思うのです。

「生きる力」って何だ？

――では、昨今すでに耳慣れた感のある「生きる力」とは、そもそも何なのでしょう。

中野　私は「生きる力」＝「コミュニケーション能力」だと考えています。

例えば、いくら自分の成績がよくても、それだけでは相手の気持ちは変わりません。むしろ態度が硬化したり、怖がられたりする。女性だとなおさらその傾向が強くなり、相手の協力を得られない。「ひとりでできるでしょ」と突き放されてしまう。そうなっては「生きる力」とは真逆ですよね。

いくら学校のテストの点がよくても、それだけでは社会に通用しません。世の中を生き抜いていくために必要なのは、引き出しの多さなんです。

大学のテストでは教科書もパソコンも持ち込み可能だったりしますよね。その上、人生には「何でも持ち込み可」です。計算機も辞書もコンピュータも、AIも、何なら助っ人も持ち込み可です。助っ人をインクルードできる力があったら無敵ですよね。

化石から解析した脳の大きさ

ネアンデルタール人

現生人類

ネアンデルタール人は額が平たく、額が前方に大きく突き出している現生人類に比べ、前頭前野が発達していないことが分かる。

引き出しを多く持ち、これはあの人に聞けばわかる、こっちは彼にやってもらうとうまくいく、あれは彼女の領分……のように振り分けていく。インクルードする力こそ生きる力と言えるのかもしれません。『持ち込み可』を駆使する力」とも言いかえられますね。

人生はそういうルールなんです。会社や学校だってそうやって機能していますよね。卑怯とか言わずに、そのルールをもっと早く教えてあげてもいいんじゃないかと思います。

世の中、それを知っている人だけが得をしています。みんなもっと得をしてほしい！

「引き出し」を増やすには？

――図画工作や美術では、いろいろな材料や用具に触れながら作品をつくり上げていきます。これは引き出しを増やすことにつながりますか？

中野　つながります。多様な手段の中から、表現したいものに合わせたものを選び取ることができる。透明感を描きたいから透明水彩、厚みを表現したいから粘土、一瞬を切り取りたいからカメラ……のように。また逆に、油彩だから、版画だからこのモチーフ、アニメーションだから……と、手法からイメージが広がるのもおもしろいですね。

――中野さんは子どものころから図画工作・美術がお好きだったとか。

中野　はい。中学・高校では美術部でした。主に油彩で風景画を描いていましたね。空間を描くのが楽しかったんです。キャンヴァスという2Dの中に3Dが生まれていく。視覚の錯覚を利用して空間がつくられていくことに喜びを感じていました。

描くことは好きでしたし楽しかった。でも、描き上げた作品はおもしろくないと感じていました。自分はアーティストにはなれない。一方で、何かを好ましいと思うとき、買いたいと思うとき、脳がどんな働きをしているのかということに興味がありました。かっこいいけれどキレイではない、美しいけれどダサいのように、ちぐはぐにも思える感情を脳はどう捉えているのか。とても不思議に感じていたんです。

そこで神経美学をやろう、脳機能と芸術的活動の関わり、仕組みを学んでいこうと、脳科学の道に進みました。

言語以外で「わかりあう」

――例えば「ずがこうさく－2（下）」の教科書には、大きな紙を自由に「ぎゅっ」として形をつくる題材ページがありますが、こうした活動で、脳にはどんな作用がありますか。

中野　音や触感を楽しみながら形を見つけていく題材ですね。未知のものや偶然を楽しいと感じることができる、まさに「わからないものが楽しい」ということを、説明せずに理解できる活動だと思います。

　新聞紙のガサガサした質感がおもしろい、粘土の触り心地が気持ちいいといった感覚に根ざした体験を、子どものころから味わえるのはとても豊かなことです。失敗を失敗として楽しむこともできますし、意図しない結果が別のよいものを生んだりもする。素敵な偶然のことをセレンディピティと言いますが、たくさんのプチ・セレンディピティを味わうことができる題材だと思います。

　年齢を重ねれば重ねるほど、言語でしかわかりあえないと思い込みがちです。こうした、言葉にしなくてもわかる経験はとても貴重。図画工作や美術の授業は「言語的な表現だけで完結するわけではないんだよ」ということを教えることができる、最後のとりでなんです。

「違う」を知り、受けとめる

――中野先生はアートの役割として「自分とは違う他者がどう思うかを考える手だて」を挙げていらっしゃいますね。

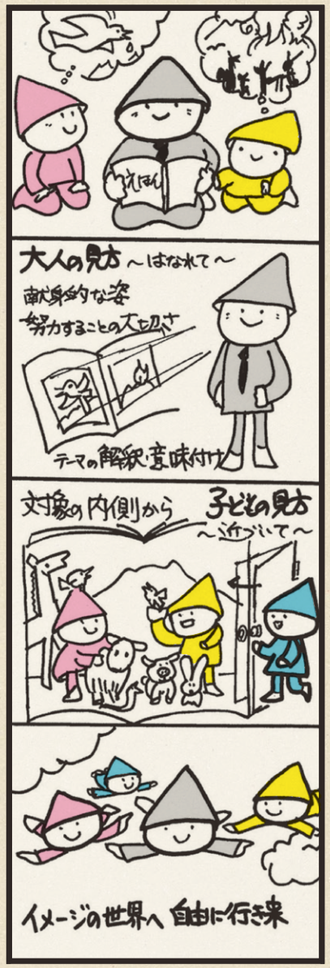
中野　昔、理科でこんなテストを受けたことがあります。教科書から出題される暗記問題は30点で、残り70点は論述。しかも「人間はどうして人間に進化したと思いますか」「宇宙は開いているか閉じているか、あなたの考えを述べなさい」など、今の科学でも答えが出ないような問題なんです。

　一所懸命考えて調べて、自分の意見をまとめて、その努力のカケラが伝われば点数が高くなる。けれど単に先生がおもしろいと思うだけでも高得点になるんですよ。たとえトンチでもかまわない。学校のテストなのにこんなのアリなんだ！と衝撃でした。

　そして自分のアタマで考えて評価される楽しさと言ったら！　しかも、オモシロ仮説の方が正しいかもしれないんですよ。それを検証していくプロセスはオトナになってからやればいい。子どもにとって大事なのは「興味をもつこと」だというスタンスなんですね。考える習慣を付けたり、みんなであそこでもないこうでもないと語らう経験をしたり。それがインクルードする力につながるんです。

　テストって勉強が得意な子だけが優遇されるイメージですよね。けれどやり方次第で、いろいろな子が活躍できるようになる。勉強が得意な子は苦手な子の考え方を知り、おもしろさに気付く。自分のアタマはガチガチに固まっていたなと思い知る。一方で勉強が苦手な子も、得意な子はこんな本を読んで調べているんだな、こんな考え方をしているんだなと気付く。お互いにアタマの中を知ることができる。

　そうした自他の違いを認識する上で、図画工作や美術の授業はとても有効です。作品はアタマの中を具現化したものですし、それを見せ合うことでおのずといろいろな「違い」が見えてくる。そんな図画工作や美術を通して、子どもたちには、多様性への寛容さを育んでいってほしいですね。



ABC PICK UP

4コマ漫画で、子どもや図工のことを学べるABCシリーズ。ここでは、同シリーズから毎号のテーマに合わせた内容を選んでご紹介します。

今回は「授業のABC」p.36をピックアップ！

子どもは対象に入ってみる

『ハチドリのひとしずく』という南米に伝わる話があります。ハチドリが森の火事を消そうと、くちばしに含んだ水を一滴ずつ落として消火しています。森の動物たちは、そんなことをして何になると馬鹿にします。ハチドリは「わたしは、わたしにできることをしているだけ」と答えます。

　この話を小学校の全校集会の時にしました。子どもたちに、一つ一つをこつこつと実行する大切さを知ってほしいと思ったからです。しかし、低学年の子どもからは「森はどうなったの？」という反応が返ってきました。子どもたちは、ハチドリではなく、火に追われて逃げまどう動物たちに心が留まったままだったのです。子どもは、対象に同化してみることができますが、大人は、解釈だとか妥当性などといって、自らの視点を固定してみようとします。子どもは、柔軟に内側から見たり、外側から見たり、自由に行き来できる力をもっているのです。素敵なことだと思いませんか。

※ 辻信一監修『ハチドリのひとしずく―いま、私にできること』光文社　2005

※このコーナーは、ABCシリーズからピックアップしたページを基に、再編集して掲載しています。

ABCシリーズのラインナップ

ABCシリーズは公式Webサイトで全編をお読みいただけます。
また、冊子をお送りすることもできます。

著者紹介
阿部宏行（あべひろゆき）

1954年生まれ。元北海道教育大学教授。中央教育審議会 初等中等教育分科会教育課程部会 幼児教育部会委員、同芸術ワーキンググループ委員（平成29年）、文部科学省「学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者主査（小学校図画工作）」（平成29年）などを歴任。

小・中・高を通して「図画工作・美術」の教科書をつくっているのは、日文だけ。これからも「図画工作・美術」を応援します。

小学校図画工作科教科書

中学校美術科教科書

高等学校芸術科美術教科書

場所や材料と対話し、没頭できるように

ここがすみか　中学年・造形遊び

三枝 清美（さえぐさ きよみ）先生　（山梨市立日下部小学校
実践時：山梨市立岩手小学校）

「小さな住人の視点になったり、上から俯瞰してみたり……。つくりかえつつある〝すみか〟に、子どもが入り込んでいくかのような姿を見られるのが楽しい」と本題材の魅力を語る三枝先生。子どもたちが没頭できる時間は、どのようにして生まれるのでしょうか。

手立て1 「校庭の隅」クイズ

導入では、活動への期待を高めるとともに見通しがもてるように、クイズ形式で「校庭の隅」の写真を提示しました。学校の近くの山には大きな石がごろごろあり、その一つ一つに神様が宿っているという言い伝えがあるのですが、そこから「石の一つ一つにも住人がいるんだって。自然豊かなところだからいろんなものがいそうだよね。校庭にもそういう場所があるかもしれないね。例えば、ここはどこかな。どんな感じがするかな」と聞きました。

手立て2 ひらめく場所との出会いをつくる

本人が「あっ、ここ！」と思う場所を見つけたときに発想が広がるので、場所の面白さや不思議さに目を向けながら「何か住んでいそうだね」と投げかけ、すみかをつくりかえる提案をします。すると、子どもたちの中にやりたい気持ちが湧き上がってくるので、「場所に合った材料を選んでいくとそこの住人さんも喜んでくれそうだね」と話し、場所探しへの期待が高まった状態で校庭に出ていきます。

授業計画

めあて
身の回りにある隅に目を向け、そこからイメージを広げつくりかえることを楽しんだり味わったりする。

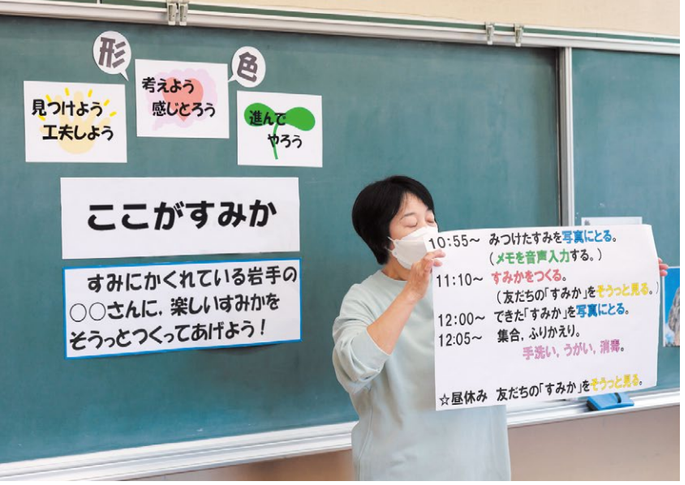
- 時数：4 時間
- 材料・用具

【教師】麻ひも、紙ひも、麻布、タブレット端末やデジタルカメラ、学校内の片隅の写真 など
【児童】落ち葉、枝、木の実、小石など活動場所で集めた自然材、はさみ、タブレット端末 など

- 活動の流れ

・校庭の片隅の写真を見たり、校庭のいろいろな場所を見て回ったりしながら想像を膨らませる。
・自分のイメージに合った場所を選び、場所の周辺から材料を集め、場所に合わせていろいろな材料を試しながら、工夫してつくる。
・自分たちの活動を鑑賞し合い、感じたことや見つけたことを交流する。

題材の目標・評価規準はこちらをご参照ください ▶



そこに出会うまでを大事にしてあげたい。すぐに出会える子どももいますが、なかなか見つけられない場合には、一緒に見て回ります。コンクリートの割れ目などの人工物を見たり、自然物を見たり……。その際、言葉をかけ過ぎず、子どもの反応を見ながら興味のありそうな場所を提案していきます。教師と子どもそれぞれが考える「いい場所」には、ギャップがあることもあります。子どもの目を信じて、任せる。私自身も子どもの見ている世界からそのよさを知る機会だと捉えています。

手立て3 住人さんの性格や生活を想像する

この造形遊びは、子どもたちが場所や材料と十分対話しながら進めていく活動を大切にしたい題材です。今回は場所が決まったらタブレット端末で撮影し、事前にそこにいそうな「住人さんの設定」を考えました。子どもたちは「遊びが大好きだからブランコをつくってあげるよ。臆病だけどとってもやんちゃ」「ふわふわのおふとんが好きな子です。コンクリートを登れるように、はしごをつくってあげるよ」など、その場所を見ながら想像を膨らませていきました。こうすることで、子どもたちは「住人さん」を思い描きながら、場所や材料と関わっていくことになります。

手立て4 声かけのタイミングを計る

活動が始まったらできるだけ子どもが没頭できるようにしたいので、声かけのタイミングにはいつも悩みます。私は、子どもが材料を取りに行くときや、手を止めたときに話しかけることが多いですね。

手元もですが、子どもの表情も見ます。そばで活動をじーっと見ていると、子どものほうから話し始めることがあります。そのときがチャンスで、「そうなんだ」「じゃあ、これは？」「どうしてこれ使ったの？」と聞くことで子どもの考えを読み取ります。先ほどの「住人さんの設定」があると、子どもの意図を理解しやすく、見取りにも役立ちます。

これまでの経験を活動に生かしている子どもには、「こんな方法もあったね」と共感的に受け止めます。学びが重なっていくことで新しい発見がある。そのことを教師が受け取って、子どもたちの中に返していくことも大切だと感じています。

＊本題材は、令和 6 年度版 図画工作科教科書 3・4 上 p.32-33 に掲載しています。

Message

子どもに任せ、発見を共に喜ぶ

「子どもに任せる」ことを大事にしています。以前は、子どもたちの到達の姿・作品を思い描き、発問や声かけを考えて取り組んでいたのですが、あるときから子どもに任せて、子どもの発見を共に喜んでいくことにしたらそれがとても楽しくて。

到達点をつくるとついつい誘導してしまいがちですが、子どもたちはこちらが予想する何倍もいろんなことをしてくれます。泉のように子どもの中から湧いてくる発想を抑えないようにしたい。

子どもたちには「感じる・考える・試す」を繰り返しながら、驚いたり感動したりする心を育てていってほしいと願っています。

令和３年度版中学校美術の教科書、どう使う？

村上センセイの 教科書利用のススメ 番外編

教科書の著者である村上尚徳先生と全国の先生が、令和３年度から使用されている教科書の題材をもとに、どんな授業展開ができるかをご紹介するコーナー。
今号は、令和７年度版教科書を活用した、授業づくりのポイントをご紹介します。

題材で身に付けさせたい資質・能力を確認する

該当題材の「学びの目標」「鑑賞の入り口」「造形的な視点」を確認し、資質・能力の三つの柱と、造形的な見方・考え方を押さえましょう。

学びの目標

顔の角度や表情、しぐさ、色彩（しきさい）などに着目し、印象をとらえ、
造形的な視点を豊かにするために必要な知識＝（共通事項）の内容
材料や用具を工夫して表す。
創造的に表す技能

身近な人の印象や性格などをもとに、表情や色彩、構図の工夫を考え、
発想や構想と鑑賞の双方に重なる資質・能力＝中心となる考え方
構想を練ったり鑑賞（かんしょう）したりする。
表現における発想や構想に関する資質・能力
鑑賞における見方や感じ方に関する資質・能力

身近な人を見つめ、特徴（とくちょう）をとらえて人柄などを表すことに
関心を持ち、意欲的に取り組む。
主体的に学習に取り組む態度や、豊かな感性や情操など

- ●知識及び技能
- ●思考力、判断力、表現力等
- ●学びに向かう力、人間性等

上記の資質・能力の三つの柱で整理されている。

〈鑑賞の入り口〉

その人の人柄（ひとがら）や心情は
どこから感じられるのだろうか。

導入で作品鑑賞する際の主発問や、造形的な見方・考え方に気付かせるための主発問に使える問いかけ。

〈造形的な視点〉

顔の角度や表情、しぐさ、色彩などに着目し、
造形的な視点を豊かにするために必要な知識＝（共通事項）の内容
意図や効果などを考えよう。
造形的な考え方

題材で着目させたい造形的な視点（共通事項）や、考えさせたい効果などを示している。＜鑑賞の入り口＞のヒントとなるもの。

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　美術編
p.9「第２章　美術科の目標及び内容
第１節　美術科の目標」

資質・能力の三つの柱を踏まえて、その題材ならではの造形的な見方・考え方を明確にして押さえることが大事なのか。

表現と鑑賞の関連を考える

表現と鑑賞の指導の関連を図る際は、発想や構想と鑑賞の学習の双方に重なる資質・能力（中心となる考え、右ページ参照）を高められるようにしましょう。

令和７年度版教科書　美術１　p.18-19

単に参考作品として鑑賞するのではなく、＜造形的な視点＞をもとに作者がどう表現を工夫したかを考えて、発想や構想の力を高めることが大切なんだな。

＜鑑賞の入り口＞で気付いた＜造形的な視点＞で鑑賞と表現を往還しながら学習を深めるといいね。

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　美術編
p.117「第４章
指導計画の作成と内容の取扱い
表現と鑑賞の指導の関連を図る」

授業の組み立てと評価のタイミングを考える

生徒の実態にあわせ、指導案をつくりましょう。評価の観点を具体化する際、表現と鑑賞を行う題材の場合は、「知識」「技能」「発想や構想」「鑑賞」「態度表現」「態度鑑賞」がそれぞれ入るようにしましょう。

指導案の一例

指導者の働きかけ（主な発問・指示）	評価方法
●＜鑑賞の入り口＞の問いかけを用い、作品を鑑賞する。 ●友達や家族などのしぐさや表情を思い起こさせ、自身が感じる「その人らしさ」はどこからきているのか考えさせる。 ●本題材で着目したい造形的な見方・考え方を確認する。	態鑑 見方や感じ方を広げようとしているか。
●描きたい人や、その人らしさが表れているものを考えさせる。発想はワークシートに書き留めさせる。	発 身近な人の印象や性格を基に、表情や色彩の工夫を考えているか。

参考資料一覧

考えたいこと	参考になる資料
学びの目標、評価の観点	教科書（学びの目標、鑑賞の入り口、造形的な視点）、題材内容資料
発想や構想	教科書（表現のヒント、資料ページ）
技法	教科書（資料ページ）、美術資料
作家情報	指導書朱書編
指導案例	指導書研究指導編、ワークシート

令和７年度版『美術』題材内容資料はこちら ▶

学びの目標の語尾を変えると、そのまま評価規準ができるんだ。指導書も開いてみよう！

生徒たちに何が残るのかを意識していく

授業では、題材の終了後に「よい作品ができた」という喜びを味わわせるだけでなく、美術科の学びとして何が残ったのかを意識させることが大切です。人物を描く際には、単に似ているように描くのではなく、〈鑑賞の入り口〉で「その人の人柄や心情はどこから感じられるのだろうか」と問いを投げかけ、掲載作品などをもとに「顔の角度や表情、しぐさ、色彩」などに着目させ、〈造形的な視点（見方、考え方）〉に気付かせることが大切です。気付いた効果を意識して作品を制作し、完成した作品を互いに鑑賞することで、造形を豊かに捉えるアンテナ（視点）を獲得することができ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力の育成につながります。

村上（むらかみ） 尚徳（ひさのり）
令和7年度版中学校美術教科書代表著作者。元IPU・環太平洋大学副学長。元文部科学省教科調査官。

※掲載している教科書は令和7年（2025年）度版 中学校美術科教科書です。

まず見る

第三七回

垂直をみる

誰もが知っている作品や、初めて出会うもの。
いつもの見方はいったん忘れて、一緒に新しい見方を試してみましょう。
それまで見えなかった作品の一面が、見えてくるかもしれません。

雨が降り始めたかもしれないと感じたとき、人はよく曇天を見上げながら、上に向けた手のひらを前に差し出します。手のひらで水平の器を作って、雨の有無を確認するわけです。この仕草は、手のひらの皮膚が敏感であるということと、垂直に降ってくる雨を、垂直に立つ人間が認識しにくいという理由から、生まれるものでしょう。この仕草を自分でやりながら、僕らは垂直に立つ一枚の板または面なのだ、としみじみ思うことがあります。あるいは例えば、正面から撮ったバストアップの写真（だけ）が証明写真と呼ばれるとき。もしくは幼児がまず正面の人の絵を描きはじめるとき。または、電車の吊革につかまって移動しているとき。はたまた、「面」という言葉自体が、顔のことを指すと同時に、薄い表層を指すのだとあらためて知るとき。そして何より、美術館やギャラリーで作品を見ているとき。自分の垂直性と正面性を意識させられる機会は多々あります。

さて今回お見せする作品は、十七世紀フランドルの絵画です。床から天井までびっしりと絵画で埋まった壁。展示するのはさぞ大変だったことでしょう。上の方にある彫刻は果たして下から見えるのでしょうか。これはハプスブルク家の大公がコレクションを公開したときの風景で、この絵自体がカタログであるとともに、大コレクターの力を誇示する役割を持っています。実際には横幅一六〇センチほどですが、画像で見るととても大きな絵に思えるのは、カタログの機能を果たすべくコレクションの数々が細やかに描かれているからでしょう。スケールがぎゅっと凝縮した絵です。

絵はこんなふうに掛けたっていいんだ——今、美術館で見るような絵の掛け方は別に当たり前ではないんだ——ということを教えてくれるだけでも興味深いですが、ここでおもしろいのは、絵の中のことごとくが垂直であるということです。絵も彫刻も人も、あらゆる要素が重力に抗って垂直に立ち、こちらに「面」を向けています。床にある作品は、椅子に立てかけてまでわざわざ垂直にしてある。例外的に水平なのはテーブルの上に広げられた紙の資料、そして棒切れを仲良くくわえた二匹の犬です。この場所では垂直方向が圧倒的に優位で、水平は二次的（資料や、動物に過ぎない）なのです。床ではしゃぐ犬たちの自由なふるまいが、垂直空間の異様さを対比的に際立たせています。

美術の空間とは、なんと一方向に偏っていることでしょう。垂直に立って暮らす人間に対して、垂直方向の美術がある、といえばそれまでですが、しかしある方向に縛られているというこの特殊な条件は、ほとんど無自覚に受け止められているようです（例えば図書館や喫茶店と比べて考えてみてください）。現代の美術には、あえて水平方向に広がったり、だらしなく重力に従って伸びたりしているような作品がよくあります。その前提に、ある方向だけが特権的な力を持っている美術空間があるということを知れば、美術館での体験もまた味わいが増すのではないでしょうか。

写真提供：ユニフォトプレス

レオポルト・ヴィルヘルム大公の絵画室

［油彩・キャンヴァス／124×165cm］1650年頃
ウィーン美術史美物館蔵
ダヴィッド・テニールス（子）
［ベルギー・1610～1690］

文

成相 肇 なりあい・はじめ

東京国立近代美術館主任研究員。一九七九年生まれ。府中美術館学芸員・東京ステーションギャラリー学芸員を経て、二〇二一年から現職。主な企画展に「石子順造的世界」、「ディスカバー・ディスカバー・ジャパン」、「パロディ二重の声」など。著書に「芸術のわるさ」（かたばみ書房）。

〈今号のひと言〉

たまたま流体力学に関する気軽なエッセイを読んでいて、我々は走ったり泳いだりしながら、「外部の流体環境に働きかけている」のだ、という記述を見つけて、なるほどおもしろい捉え方と思った次第です。ふだんの生活で、みんなは空気に対して「働きかけて」いるなんて、なかなか考えつかないですね。

東京国立近代美術館展覧会情報
「ハニワと土偶の近代」
（二〇二四年十月一日～十二月二日）

児童作品解説 私の見方

文：群馬大学 教授 林 耕史（はやし こうし）

ベトベト［段ボール・液体粘土・絵の具／38×54cm］
みんなの図工ギャラリー　1・2年生の作品　とろとろえのぐで　かく　掲載

みんなの図工ギャラリー
はこちらから

一目見ただけで画面に吸い込まれそうになります。そして、その迫力に感動しつつ、「何が描かれているか」より「何が行われていたか」と思いを巡らせたくなります。

これは、絵の具で色をつけた液体粘土による小学校二年生のフィンガーペインティング作品です。グレーを基調とした画面の中に、細めのくっきりした線の組み合わせで描かれた模様のような部分が浮かび上がっています。

四本指による三回のストロークを二本指の線で束ねた後、太い線でぐるぐると画面全体を走破して、製作の区切りをつけたように見えます。赤みを帯びたグレー調の液体粘土からは、さまざまな色の絵の具を混ぜては描き、を繰り返してその行為を楽しんだことが分かります。画面上の痕跡のほかに、液体粘土の色にも試行錯誤の時間の集積が見て取れるのです。

注意深く見ると、明るい赤や緑、青の部分があることに気付きます。当初の画面には鮮やかな色彩があったのでしょう。いろいろな絵の具が混ざり、次第にグレーになっていく色の変化と、手のひらや指の動きから生まれる多様なテクスチャーを楽しんだのだろうと思います。存分に楽しんだ後、四本の指を少し立て気味にして鋭くひっかくようにして、最後に太い線でフィニッシュ！　そんな一部始終が目に浮かびます。

作品タイトルが『ベトベト』であることからも、この子にとって、「何を描いたか」より「こんなふうになっていったんだよ！」という、楽しかった描く行為の記憶が全面からあふれ出ているように思います。

あなたはどう思いますか？

| 小 | 中 | 高 |

形 forme　No.334-2024

日文教育資料［図画工作・美術］
令和６年（2024年）10月７日発行

編集・発行人　佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261
FAX：06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33748

日本文教出版株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261　FAX：06-6606-5171

東京本社　〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL：03-3389-4611　FAX：03-3389-4618

九州支社　〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL：092-531-7696　FAX：092-521-3938

東海支社　〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F-B
TEL：052-979-7260　FAX：052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL：011-764-1201　FAX：011-764-0690